

今回の報告で取り上げるテーマは、大正末から昭和戦前期にかけて営まれた都市美運動の主軸行事となった「植樹デー」と呼ばれる記念植樹である。都市美運動とは、都市空間における美観を向上させることを目的に組織された都市美協会が牽引した活動を意味する。ここでは特に日本の都市美運動の手本となった欧米の都市美運動を比較対象として、同協会副会頭を務めた東京帝国大学教授本多静六が中心となって提唱した記念植樹の方法論と都市美協会の具体的な活動を分析することにより、同時代の都市社会における公共美と緑化の関係性、および日本の都市美運動の原動力になり得たと考えられる自然観について考察する。

そもそも都市美運動とは、欧米においてはドイツの音楽家ルドルフ(1840-1916)やアメリカの造園家オルムステッド(1822-1903)が説いたように、郷土風景の保存や衛生上の風致改善を目的に、都市の緑を保全、且つそれを植え育むことを理念として開始されたものである。アメリカにおいてはプロテスタント宣教師で教育家のノースロップ(1817-1898)が、経済および教育に資するものとして学校樹栽運動を推奨した時期と重なることから、その背景には都市における植樹が推進される状況があったといえる。

一方、日本の都市美協会が発足したのは大正15年(1926)であり、それは数万の命が失われた関東大震災後の焦土と化した市街地再生を機とするものであった。そこでは防災、風致を目的とする公園および公園道路設置から、建造物や看板等の高さや色彩に関する規制などを含めた、都市の外見的な美観形成を問う実践的事業に限らず、「樹魂祭」と呼ばれる記念植樹式や神社に奉納される献木奉告祭、東京の水源地を祀る「水神祭」が営まれた。このように「祈り」や「祭式」が日本の都市美の活動の支柱にあったことは、諸外国の例にみないところであった。「明日の田園都市」を構想したハウードの説では、「神の創造した樂園としての田園に対し都市の道路とは人間側の創造に属する」ものである。しかし、帝都復興を祝す「東京市道路祭」に見る如く、舗装した道路にさえ神聖さを見出そうとし、その靈性を敬うところに始まるのが日本の都市美運動であった。このことが明確に示されたのが、明治神宮に奉納された慰霊の要素を含む「都市美協会献木奉告祝詞」である。本文には、「都市美協会」という会まどいを起こした志厚き人々が数多の樹木を植栽し、都をもとよりも愛でたく美波うるわしく造成した、と書かれているが、本報告ではこの祭式も取り上げ、緑化に係る「儀式性」と「実用性」を重視した都市美協会の設立の理念について検討を加える。

しかしながら日本の都市美運動は欧米の市民運動のように展開せず、「官製運動」に過ぎなかったという指摘もある。だが、「植樹祭」を主力行事とする緑化活動が、同時代社会、また戦後に引き継がれて実施されたのは、欧米流の独立的、個人主義的な市民精神に由来する活動というよりはむしろ、日本人の感性やメンタリティを尊重した、相互扶助の精神に基づく市民の協働意識が重視されたところにその発展を見たといえるのではないだろうか。即ち、都市美の指導者たちは、活動の原動力となり得る自然観については、単に近代合理的、実践的な側面のみならず、古来の自然信仰や精神性を取り入れることによって、謂わば都市美運動を土着化させることによって、日本の都市美を構築しようとしたと考えられるのである。山岳信仰を身に付けた本多がラジオ講演で、「神も佛も樹を植ゑるものを助け、樹を植うる人は健康で長壽で、幸福になり、又、樹を植ゑる國は平和で富み、且つ榮ふる」と説いたように、1本の樹木でも多くの人々が植えれば立派な森となるように、一人の参加意欲が、都市の美化、ひいては国土の美化に結びつくこととみなされたのである。その意味ではたとえ官製運動であろうとも、緑化運動としての都市美運動は成功したといえる。つまり日本の都市美運動とは、いのちを敬う儀式的な事業と、都市と山村を緑で結ぶインフラ整備としての実用的な事業、換言すれば「祈りと実践」という二つの要素に支えられて営まれるものであり、健康的な美を感じる人心の涵養こそを要とする、「心と形」を美しくする活動だったといえるのではないだろうか。